

## ハイデガーとシェリング

——知の介在性との連関における根底と  
実存及び思惟以前の存在について——

小田切 建太郎 (京都大学)

### はじめに

振り返れば、ハイデガーがヤスパースを介して<sup>1</sup>『人間的自由の本質とそれに連関する諸対象に関する哲学的考察』(1809. 以下では『自由論』と略記する)<sup>2</sup>を中心としたシェリング哲学と本格的な出会いを果たしたのは、『存在と時間』(1927)の公刊以前の1926年の春であった<sup>3</sup>。その後、1927/28年冬学期には『自由論』に関する演習<sup>4</sup>を行い<sup>5</sup>、1936年の夏学期講義<sup>6</sup>においてこれに関する本格的な解釈を遂行することとなる。1941年の講義<sup>7</sup>でもふたたびこれを取りあげている。このような経緯は、多かれ少なかれハイデガーとシェリングの近しさ——ハイデガーとヘーゲルのあいだには見られないような——を証している。1927/28年冬学期の演習<sup>8</sup>に参加したガダマーは、そこでハイデガーが人間の実存をはじめとする事実性一般における「根拠の解き明かし難い暗さ」(GGW 3, 306)を後期シェリングの「思惟以前のもの」(GGW 2, 103)のなかに再度認識したと述懐している。本稿では、

<sup>1</sup> Vgl. Briefwechsel, 62. なお、文献略号一覧については本稿末尾を参照のこと。

<sup>2</sup> Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph, *Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände* [1809], in: Ders., *Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling Sämtliche Werke*. Ab. I. Bd. 7. Hg. von K. F. A. Schelling. Stuttgart: Cotta'sche Verlag 1860, S. 331-416.

<sup>3</sup> 茅野良男は、ハイデガーが神学部時代に神学者 C.ブライク (Carl Braig, 1853-1923) からヘーゲルとシェリングの思弁神学に対する意義を教えられたとするが(茅野良男『ハイデッガー』講談社、1984年、10-11頁を参照)、この際の実理解は表面的なものに留まったと思われる。

<sup>4</sup> Vgl. Schelling: *Das Wesen der menschlichen Freiheit*. Protokollheft aus dem WS 1927/28, in: Lore Hühn u. Jörg Jantzen (Hg.), *Heideggers Schelling-Seminar (1927/28)*. Stuttgart: fromman-holzboog 2010 (=Schellingiana Bd. 22. Hg. von Walter E. Ehrhardt u. Jochem Hennigfeld im Auftrag der Internationalen Schelling-Gesellschaft), S. 331-372.

<sup>5</sup> Vgl. Briefwechsel, 80.

<sup>6</sup> Heidegger, Martin, *Schelling: Vom Wesen der menschlichen Freiheit (1809)*. [Freiburger Vorlesung im SS 1936]. Hg. von Ingrid Schüßler. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1988 (=Gesamtausgabe Bd. 42. II. Abteilung. Vorlesungen 1919-1944).

<sup>7</sup> Heidegger, Martin, *Die Metaphysik des deutschen Idealismus. Zur erneuten Auslegung von Schelling: Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände (1809)*. [Freiburger Vorlesung I. Trimester 1941 u. Freiburger Seminar im SS 1941]. Hg. von Günter Seubold. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1991 (=Gesamtausgabe Bd. 49. II. Abteilung. Vorlesungen 1919-1944).

<sup>8</sup> 晩年のガダマーは、確かに1927/28年ではなく、1925年に『自由論』に関するハイデガーの演習に出席したと述べている (Vgl. GGW 3, 306)。だが、マールブルク大学の講義及び演習のタイトルの記録を検証した結果、ガダマーが1925年と記憶している演習は、実際には1927/28年冬学期のものとする訂正意見が研究者によって提出されている (Vgl. Bericht, 290-293)。J.グロンダンもガダマーの記憶に疑念を呈している (Vgl. Grondin, Jean, „Die späte Entdeckung Schellings in der Hermeneutik“ [1997], in: I. M. Fehér und W. G. Jacobs (Hg.), *Zeit und Freiheit. Schelling – Schopenhauer – Kierkegaard – Heidegger*. Budapest 1999, S. 65-72)。本稿も、こうした訂正意見に従うこととする。

このこれまでほとんど顧みられてこなかった指摘を最初の糸口にしたい<sup>9</sup>。これは、ハイデガーが『自由論』に留まらず、後期シェリングにも目を向け、そこにおける消極哲学と積極哲学の区別において後者が取り扱う、人間的理性の外に存する最根源的意味での事実性に対して少なからぬ関心を向けていたことを示唆するものである。

そこですぐさま予想されるのは、ハイデガーによるシェリング読解では、人間における知と存在の関わりが大きな関心事となっていたはずだ、ということである。言うまでもなく、『自由論』の主題は人間的自由であるし、後期シェリングでラディカルに問題となるのは、理性的思惟の必然性によっては導出することが不可能であるような偶然的な事実性であり、また消極哲学の理性的思惟の限界にほかならなかったからである。こうした見立てを念頭に置いて、ハイデガーの『自由論』解釈を見たとき、そこにおけるハイデガーの中心的な関心が、根底と実存の区別や無底といった問題事象の陰に従来隠れていた——むしろそれらの重要性を否定するつもりは毛頭ない——、後期思想における現 - 存在 (Da-sein) の問題を背景にした、人間における知の役割に向けられていることがわかる。そこで問われるべきは、如何なる人間の役割がそこで求められていたか、である。これがここでの問いである。そして、それは非主体的ないし非主観的な人間理解、つまり介在的であるという意味で非主体的な人間における知の役割であった、というのがここでの主張であり、その解明がここでの課題である。

より具体的には、本稿の目的は、後期ハイデガーに見られる人間における知の介在性、その介在的な働きの意味を、根底と実存、思惟以前の存在といった問題事象との連関において解明することにある。言い換えれば、初期思想の現存在自身のために (Umwillen) が構成的な役割を果たす超越と地平によって特徴づけられるある種の間人中心主義があるとすると、これとは別の問題構成における人間の役割を、ハイデガーによるシェリングの『自由論』の解釈及び両者における思惟以前の存在の意味に関して考察することで示すことである。思惟以前の存在に関して、従来は (最) 初期ハイデガーと思惟以前の存在の (影響) 関係が取り上げられてきたが<sup>10</sup>、本稿ではむしろ後期ハイデガーとの関係を問題にしたい。その理由は、まず従来考えられてきた思惟以前の存在の (最) 初期ハイデガーへの影響が近年疑問視されている点<sup>11</sup>、加えて後期ハイデガーのテキストにもその語が登場する思惟以前の存在の問題が——それが彼の思想 (形成) において重要な意味を持つと考えられるにもかかわらず——これまで等閑視されてきた点に求めることができる。

以下が解明の具体的手順である。まず、後に自己批判の対象となるハイデガーの現存在の超越の基本的理解を形而上学期に属す 1928 年夏学期講義に確認し、そこにハイデガーと思惟以前の存在の事象的な結びつきを見る先行研究 (M.ガブリエル) の解釈に批判的検討を加える (第 1 節)。つぎに、1936 年夏学期講義における『自由論』解釈を参照しつつ、

<sup>9</sup> Vgl. GGW 3, 306. イムダールもガダマーの記憶に半ば依拠するかたちで最初期ハイデガーの生の事実性とシェリングの「思惟以前のもの」を結びつける (Imdahl, Georg, *Das Leben verstehen. Heideggers formal anzeigende Hermeneutik in den frühen Freiburger Vorlesungen (1919 bis 1923)*). Epistemata Philosophie Bd. 206. Würzburg: Königshausen & Neumann 1997, S. 60)。

<sup>10</sup> Vgl. Schulz, Walter, „Über den philosophiegeschichtlichen Ort Martin Heideggers“, in: Otto Pöggeler (Hg.), *Heidegger. Perspektiven zur Deutung seines Werkes*. Köln/Berlin: Kiepenheuer & Witsch 1969, S. 95-139.

<sup>11</sup> Vgl. Bericht, 290-293.

『自由論』における根底と実存の区別における神の生成、創造作用と、そこに巻き込まれている人間における知の介在性に関して、「神の知的愛 amor Dei intellectualis」(スピノザ)に象徴される新プラトン主義的背景やこれについての研究を参照しつつ明らかにする(第2節)。そしてこれを受けて、後期シェリングのテキスト「積極哲学の諸原理の別の演繹」を取りあげて、理性的思惟と思惟以前の存在の関係に関して明示する(第3節)。最後に、後期の対話篇「アンキバシエー [=接近]」(1944/45)を参照しながら、形而上学的な表象的思惟に対する(自己)批判の所在を明確化しつつ、ハイデガーの後期思想の存在そのものと思惟以前の存在の結びつき、そして存在の(非)覆蔵性の自己覆蔵性、存在の自己贈与、存在のゲシック(Geschick)の自己変貌に巻き込まれた人間における知、言葉の介在性、その役割について解明していきたい(第4節)。

## 1 節 ハイデガーの形而上学構想における脱根拠性とシェリング

本節では、『存在と時間』を中心とした初期の後につづく——そして1936年の『自由論』解釈の前段階としての——形而上学期の思想とシェリングの思惟以前の存在との近さを、これに関する先行研究のひとつである M.ガブリエルの見解を批判的に検討しつつ明らかにしたい。まず、1928年夏学期講義<sup>12</sup>における現存在の超越、自由についてのつぎの記述を見てみたい。

〔現存在自身の〕〈そのために Umwillen〉という自由な対持 Widerhalt は、〔…〕超越として、事実に faktisch そして事実に tatsächlich 存在するものを飛び越えるという性格を持つ。超越するものとしての現存在の本質的かつ内的な諸可能性の全体としての世界は、あらゆる現実的存在者を凌駕する übertrifft。<sup>13</sup> (GA 26, 248)

ここで端的に述べられているのは、現存在が存在者を創造するものではなく、むしろまずもって現実存在する存在者を乗り越える。この乗り越えのうちにこそ、「存在と存在者の区別の遂行」(Ebd., 199)があるというのである。「それが存在を与える es gibt Sein のは、ただ現存在が存在を了解する場合だけである」(Ebd., 199)。つまり、〈それが存在を与える es gibt Sein〉の「それ es」は、〔…〕おのれを時間化する時間性」であり、この「時間性が脱自的統一として時間化するものが、〔…〕世界」(Ebd., 272)である。現存在は時間化に基づく超越によって存在者と存在を区別し、存在の超越論的地平(世界)を根源的な仕方

<sup>12</sup> Heidegger, Martin, *Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz* [Marburger Vorlesung SS 1928]. Hg. von Klaus Held, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1978 (=Gesamtausgabe Bd. 26. II. Abteilung, Vorlesungen 1919-1944).

<sup>13</sup> 傍点による強調は原文による。なお、これと同様、本稿における引用文中の傍点による強調は、特に断りがない場合は原文に従ったものである。

gibt] (Ebd., 195) という人間の人間自身への関わりとして人間中心の問題構成において考えられている。そのように現存在が自らに付与した存在 (世界) から「自体的存在者」(Ebd., 281) の真理 (アレーテイア) が可能になる。そしてまた、この超越の自由の開け、脱根拠的な開けから、事実的な存在者へ向けた〈なぜなにもないのではなく、むしろなにかがあるのか〉、〈なぜあれよりもむしろこれがあるのか〉、〈なぜ別様にではなく、このようであるのか〉<sup>14</sup>といった形而上学の問いが発せられることとなるのである。こうした現存在の超越の自由によつて、ハイデガーの形而上学期の思想における、問いと「根拠の根拠 Grund des Grundes」(Ebd., 277) ないし「脱根拠 Abgrund」(Ebd., 234) が存することとなる。

こうしたハイデガーの思惟に、M.ガブリエルは、シェリングの思惟以前の存在との近さを見る。ガブリエルは、アリストテレスを参照しつつ<sup>15</sup>、シェリングの思惟以前の存在の偶然性を「別様でありうること Anders-Sein-Können」(Gabriel 2010, 88) と規定する。そして、「存在そのものが偶然的だとすれば、[...] 存在そのものが〈別様でありうること Anders-Sein-Können〉を考えること」(Ebd., 88) ができるという存在の偶然的可能性を改めて明確化する。そのうえで、ガブリエルは、シェリングの「思惟以前の存在は、まったくき仕方てハイデガーの意味における」(Ebd., 96)、すなわち『根拠の本質』(1929)における「根拠の根拠」(GA 9, 174)<sup>16</sup>ないし「脱根拠 Abgrund」(Ebd., 174)<sup>17</sup>なのだと述べる<sup>18</sup>。問いが発せられる思惟の空間そのものには「如何なる根拠も与えることができない」(Gabriel 2010, 96) ことから、ハイデガーの現存在の自由における脱根拠性と、シェリングの思惟以前の存在の脱根拠的偶然性とが重ねられるのである。つまり、超越の構成する世界、ないし思惟の空間の無根拠という点において重ねられるのである。

あるいはこうしたハイデガーとシェリングとの近さには、具体的な影響関係を見ることも可能かもしれない。だが、ここではむしろ、ガブリエルが明確化した「存在そのものが偶然的だとすれば、[...] 存在そのものが〈別様でありうること Anders-Sein-Können〉を考える」という可能性を軸に彼のハイデガー解釈をもう少しだけ——批判的に——追跡し、後期ハイデガーにおける存在そのものの自己贈与の意味を理解するための手がかりを探ってみたい。

以下の点では、ガブリエルに批判的に距離を取る。彼によれば、後期ハイデガーの存在そのもの (Sein selbst) とは「存在と存在者の差異の生起」(Ebd., 106) であるが、この「差異の生起は、存在を了解するものとしてまずもって存在と存在者を自らの超越によって区別するところの現存在なしには不可能である」(Ebd., 106)。これは、形而上学期のハイデガーの発想そのものである。しかし、ガブリエルは、この超越の発想から後期ハイデガーの存在史 (Seinsgeschichte) の意味を理解する。それによれば、存在史の変遷は現存在の超

<sup>14</sup> Vgl. GA 26, 141.

<sup>15</sup> 「「偶然的」であるのは、アリストテレスの尺度付与的な規定によるなら、「別様でありうるもの dasjenige, was anders sein könnte (ὁ ἐνδέχεται ἄλλως εἶναι)」のことである」(Gabriel 2010, 88. Vgl. Aristoteles, Ethica Nicomachea, in: Ders., *Aristoteles Graece ex recensione Immanuelis Bekkeri*. Vol. 2, edidit Academia Regia Borussica. Berolini: Apud Georgium Reimerum 1831, p. 1139a8)。

<sup>16</sup> Vgl. GA 26, 277, 283.

<sup>17</sup> Vgl. Ebd., 234.

<sup>18</sup> Vgl. Gabriel 2010, 96.

越による了解と解釈に存するものにほかならないものとなる。現存在は、超越において「存在者の存在をそのつど別様に了解する *jeweils anders versteht*」(Ebd., 105) のであり、そのようにして哲学史上において、存在は、「そのつど別様に解釈され *jeweils anders ausgelegt*」(Ebd., 106) てきた。よって、存在史とは、「存在概念の連続 *Abfolge der Seinsbegriffe*」(Ebd., 105) に存する「存在概念の歴史」(Ebd., 105) に過ぎないことになってしまう。要するに、ガブリエルは、〈別様にありうること〉という存在の偶然的変容可能性を、現存在の超越、その自由意志の次元に還元してしまうのである。本稿が、距離を置きたいのは、まさにこの見解である。そもそも存在史は、概念史ではない。存在の贈与の歴史であるはずである。それゆえ、存在の(偶然的)変容があるとすれば、それは存在そのものの自己贈与にこそ基づくこと、そしてそこでの人間の役割がこの自己贈与及び自己覆蔵の働きを介在する知という点に存することが以下で説明されるべきである。

## 2 節 『自由論』における根底と実存の区別における知の介在性

そこで、つぎに第2節では、1936年夏学期講義のハイデガーの『自由論』解釈の関心として人間存在の知を明確化する。これは、形而上学期の後、後期思想へつづく過渡期に属す最も重要な講義のひとつである。具体的には、この『自由論』解釈を参照しつつ、根底と実存の区別における生成する生命としての神の創造過程と、そこにおける人間の介在的な知について明確にしなければならない。

ハイデガーは、『自由論』の本格的な解釈に入るに先立ち、あらかじめつぎの引用を最重要箇所として提示している<sup>19</sup>。

人間のうちには、闇の原理のまっつき力があると同時に光の原理のまっつき威力がある。人間のうちには最深の深淵と最高の天空、あるいは両者の〔二つの〕中心 *Centra* がある。人間の意志は、まだ根底にある神の永遠の憧憬に隠された萌芽であり、神が意志を自然へ決したときに見て取った、深さのうちに閉ざされた神的な生命の閃光である。(SW I-7, 363)

この講義では、『自由論』を序論 (Ebd., 336-357)<sup>20</sup>と本論の7つの章 (Ebd., 357-416) に分ける<sup>21</sup>。ハイデガーはこのうちの序論と本論の最初の4つの章 (Ebd., 357-394) に「シェリングの論文の本来の重要性」(GA 42, 281) を洞察する。うへの箇所は、『自由論』の序論 (SW I-7, 336-357) が終わり、本論 (Ebd., 357-416) に入って暫くしたところにある。ここは、シェリング自身が、『自由論』の「考察全体の最高点」(Ebd., 406) と考える後半部分にはまだ届いていない。それにもかかわらず、ハイデガーは、この箇所を理解することが、とりもなおさず「この論文 [= 『自由論』] 全体を把握することである」(GA 42, 93) とその重要性を強調するのである。この背景にあるのは、同じ箇所を示唆されるように、後期

<sup>19</sup> Vgl. GA 42, 93.

<sup>20</sup> Vgl. Ebd., 23.

<sup>21</sup> Vgl. Ebd., 182.

思想圏に属す「現 - 存在 Da-sein」(Ebd., 92)における人間への関心である。この関心こそが『自由論』解釈の根幹にあったものである。ハイデガーは、この講義をつぎの言葉で締めくくっている——「人間とは、神が自らを啓示する sich offenbart とき、神がその力を借りてのみそもそも自らを啓示する sich [...] offenbaren ことができる者であらねばならない他者である」(Ebd., 284)。これは、シェリングというよりも、むしろハイデガーの見解である。

また『自由論』の序論では、人間の自由は「体系を統べる中心点」(SW I-7, 336)である、と宣せられる。同じく後半部分では、「神の悟性のなかに体系がある。しかし神自身は、体系ではなく、生命である」(Ebd., 399)と言われる。先取りして言えば、悟性に置かれた体系の中心点としての人間と、それ自身は体系ではない生命としての神の関係に、ハイデガーは『自由論』の決定的な困難を見る。以下では、人間における知の介在的な役割を明らかにしながら、この困難の意味へ歩みを進めたい。

スピノザが、神の「外部に extra」(Ebd., 344)<sup>22</sup>にも、神の内部にも神の「ほかに praeter」(Ebd., 344) なにも認めないのに対して、シェリングは、神とは切り離せないが神のほかに (praeter) 神の内なる自然 (Natur in Gott) を置く。この神の内なる他者である自然の根底は、「永遠なる一者が自己自身を生まんとして感ずる憧憬」(Ebd., 359) である。これが「神の現存在の最初の活動」(Ebd., 360) として、まず神自身のうちに、それによって「神が自己自身を見る」(Ebd., 360 f.) ところの「内的な再帰的表象」(Ebd., 360) を生み出す。この再帰的表象において、神は、最初に「現実化される」(Ebd., 361)。シェリングは、この表象を、憧憬の「悟性」、「ことば Wort」(Ebd., 360) であるとする。

ことばを自らのうちで感じ、そして同時に無限の憧憬を感じる永遠の精神は、精神それ自身である愛によって動かされてことばを語り出し、そうして、悟性は憧憬とともに自由に創造する全能の意志となり、原初には無規則である自然を自らのエレメントないし道具としてそのうちに形象化する。(Ebd., 361)

精神は、神が憧憬のことばのうちに自らを見て取るという再帰性のうちで成立する。この再帰性はおのれへ立ち帰ると同時におのれから歩み出る、そこからズレる差異化の働きである。つまり、神は、「原初の自然へことばを語り入れることでおのれから歩み出る」(GA 42, 224) のである。神は再帰的な自己展開において、実存者となるべく歩み出るのである。

「永遠の精神」とは、そのうちで神の自己自身への統一 Einheit des Gottes zu sich selbst、絶対者の統一性が自らを展開する sich [...] entfaltet こととなる規定である」(Ebd., 224)。この精神の差異化的再帰性は、ある種の規則化として把握される。つまり、これは神が「自身において、根底の無規則な自然のうちへ〈自らを語り入れること Sichhineinsprechen〉として〈自らを語り出すこと Sichaussprechen〉」(Ebd., 224 f.) である。悟性の意志はその「最初の働き」(SW I-7, 361) として、根底の意志に抗して「諸力の分開」(Ebd., 361) を行う。この分開の「段階的に生起する」(Ebd., 362) 展開において自然の様々な存在者が成立して

<sup>22</sup> Vgl. SW I-7, 357.

くる。この段階のうちに人間が成立する。

自然が見いだされる瞬間には創造者が自然から歩み出て、自然を乗り越え *übersteigen*、それによって自然の上に立た *über ihr stehen* なければならない。自然の創造が静止し変貌する自然の最高の段階においてこそ、人間が発生する。（GA 42, 233）

人間は、被造物として根底の意志と悟性の意志をともに持つ。根底の意志は、被造物においては普遍的でない特殊な「我意 *Eigenwille*」である。人間の我意それ自身もひとつの「特殊意志」（SW I-7, 363）であるが、すべての特殊意志の中心として、悟性の意志と統一的となる。この根底に由来する原理において人間は神から区別される。『自由論』はつぎのように述べる。

自然の根底から押し上げられてきた原理、人間がそれによって神から分かれた原理は、人間の内の自己性であるが、それは観念的原理との統一によって精神となる。自己性そのものが精神である、あるいは人間が自己的な特殊な（神から分かれた）存在者として精神である。この結びつきがまさに人格性を形成する。自己性が精神であることによって、自己性は同時に被造物から超自然的なものへ高められている。自己性は、まったく自由において自己自身を視る *sich selbst [...] erblickt* 意志であり、もはや自然のうちに創造された普遍意志の道具ではなく、自然を超え自然の外にある。精神は、自然において光と闇の原理の統一を超えて高められたものとして、光を超えている。自己性は、精神であることによって、両原理から自由である。（Ebd., 364）

ハイデガーによれば、人間は、自己的で特殊な存在者である点で神から区別されていることで、「根底の最も隠された意志を意志する」（GA 42, 245）。そして同時に、精神として「分離された特殊化の統一のうちで自己自身を視る *sich selbst erblickt*」（Ebd., 245）。この「〈自己自身を視る〉という精神の働きにおいて、人間は従来の意味での一切の自然と被造物を超え出る *ist [...] hinaus*」（Ebd., 245）のである。こうしてハイデガーは、本節冒頭で引用した箇所についてつぎのように述べることとなる。

まさに人間の内なる根底のこの意志は、人間のうちでこそ悟性の光へ高められ、人間のうちでこそ、ことばはまったく仕方でも語り出される。人間は自ら語り、言葉のうちで本質化する。そうすることで人間は悟性の光を超えて *über* 高まる。人間は動物のようになにか照らし出されたものうちを動くのではなく、むしろこの光を語り出し、この光を超えて高まる。そうして光を超えていることで、人間は、[...] 光と闇を自らの相互関係そのものうちで支配する統一化 [...], 精神である。人間のうちには——私たちの知る限り人間のうちにおいてのみ——二つの原理、根底の最深のものつまり自己性への我意 *Eigenwille* と、ことばの最高のものつまり全体の統一の照らし出された存在への意志、つまり固有の統一がある。人間のうちには「最深の深淵と最高の天空」がある。（Ebd., 245 f.）

ハイデガーは、人間の自由に、悟性の光と根底の闇の統一を見ているようにも見える。だがもう少し、見ていきたい。シェリングはつぎのように述べる——「ただ彼において（人間において）のみ、神は世界を愛した In ihm (im Menschen) allein hat Gott die Welt geliebt」（SWI-7, 363）。これは神が自らの世界を愛するある種の再帰的な自己愛である。神と世界のあいだには差異があるが、両者は別個のものではなく、差異を伴った同一性のうちにある。人間はいわば両者の差異のあいだにある——あるいはあいだである。ここで神の自己啓示や自己表象の働きが再帰表現（sich offenbaren/sich erblicken）であることは、そこでの人間における知の位置づけを考えるうえで重要な示唆である。そこで『自由論』の序論で、人間における知についてシェリングが、セクストゥス・エンピリクスがエンペドクレスについて述べた「自らの内なる神によって自らの外なる神を把握する」（Ebd., 337）という原理を引き合いに出していたことが想起される。この記述に関して、ハイデガーは、「もし眼がそれ自身太陽的でなければ、眼は太陽を見ることがなかっただろう οὐ γὰρ πρόποτε εἶδεν ὀφθαλμὸς ἥλιον, ἡλιοειδῆς μὴ γεγενημένος」（Enneaden 1. 6. 9）という『エネアデス』の言葉を引用して、「プラトンの - プロティノスの原理」（GA 42, 96）を提示する<sup>23</sup>。だがこれは、ある者が他者をただ単に相似性、類似性において認識するということではない。ここにおける人間と神の関係をより詳細に理解するために、ホクレーベなどがシェリングのなかに洞察する<sup>24</sup>、『エチカ』におけるスピノザ<sup>25</sup>の「神の知的愛 amor Dei intellectualis」<sup>26</sup>が引き合いに出されるべきである。これは、「神は無限の知的愛をもって自己自身を愛する Deus se ipsum amore intellectuali infinito amat」（Ethica V. Prop. 35）という再帰的な自己愛である。分節化すると、これは神の「人間に対する erga homines」（Ebd., V. Prop. 36）愛と、人間の「神に対する erga Deum」（Ebd., V. Prop. 36）愛からなる〈神の〉再帰的な自己愛である<sup>27</sup>。つまり単に神が神自身を愛するのではなく、神が人間を介して——つまり〈人間が

<sup>23</sup> 一般にハイデガーと新プラトン主義との関連はほとんど無視されるが、最初期ハイデガーは、アウグスティヌスにおける自由理解に関して、「一切の被造的存在は〈一者〉からおのれの存在を獲得する。このかぎり、この〈一者〉から離れはするが、同時に〈帰還 recursus〉の傾向を持つ〔…〕。魂の存在には、それが由来したところへの帰還 Rückkehr が属す」という「新プラトン主義の教義に由来する二重の運動」（GA 17, 158 f.）によって規定されている。ハイデガーは、デカルトの自己意識の確実性（certum）とアウグスティヌスにおける自己の確実性（Gewißheit）を区別して後者により高い評価を与える。それによれば、「アウグスティヌスの意味における自己確実性 Selbstgewißheit とその〈自己 - 自身を - 持っていること Sich-selbst-haben〉は、「コギト」のデカルト的な明証性とはなにかまったく異なる」（GA 60, 298）ものとして評価される。これは、善（アガトン）としての〈自己自身のため〉を慮る、中動態（vox media）を根本動態とする（自己）関心（Sorge/cura）の概念へと引き継がれる（拙論「初期ハイデガーにおける関心の中動態」『立命館哲学』第 28 集、立命館大学哲学会編、2017 年 3 月、87-108 頁を参照）。

<sup>24</sup> Vgl. Gabriel, Markus, *Das Absolute und die Welt in Schellings Freiheitschrift* (Bonner Philosophische Vorträge und Studien 25. Hg. von Wolfram Hogrebe). Bonn: University Press 2006, S. 33 und S. 62 Anm. 59 und Düsing, Edith, „Fichtes späte Religionsphilosophie“, in: Walter Jaeschke (Hg.), *Der Streit um die Göttlichen Dinge (1799-1812) mit Texten von Goethe, Hegel, Jacobi, Novalis, Schelling, Schlegel u.a. und Kommentar*. Hamburg: Felix Meiner 1994, S. 125.

<sup>25</sup> ドイツ観念論の重要な精神的な水脈のひとつであるスピノザ主義に今後さらに光を投げかける資料として、田中光が雑誌『モルフォロギア』（「ゲーテ自然科学の集い」編）に 10 年以上に亘り掲載してきたヤコービの『スピノザ書簡』の翻訳を挙げておく。

<sup>26</sup> Vgl. Ethica, V. Prop. 32-36.

<sup>27</sup> スピノザは、「神は自己自身を愛する限りにおいて人間を愛する」（Ethica V. Prop. 36）なのであって、自らへの愛なしに人間を愛することはない。あるいは厳密には、「神が人間を愛するなど」



神を愛する) という働きを介して——自己自身を愛するという自己愛である。スピノザ研究者であるゲーブハルトは、この再帰性が、「流出によって世界が神性から出来し、そしてまたその世界が魂において神へ帰還する kehrt [...] zurück」<sup>28</sup> という新プラトン主義の基本的発想に淵源することを指摘する。言い換えれば、創造者から発した創造行為が人間の「知的部分の働きを介して mediante 創造者に帰還する」(エブレオ<sup>29</sup>)<sup>30</sup> ところにこそ創造行為の完成を見るという〈人間における知的認識を介した〉創造的円環性である。世界が「自己自身を認識する erkennt sich selbst」働きの「自己認識の構造 *autoepistemische Struktur*」の「再帰性 Reflexivität」<sup>31</sup> (ホクレーベ) である。実のところハイデガーの言う「プラトンの - プロティノスの原理」というものも、この人間における知を介した神ないし世界の再帰的な自己視であったと考えられる。実際ハイデガーは、『自由論』の解釈にあたって、「全体としての存在者が自らを知る結構 *das sich wissende Gefüge*」(GA 42, 157) という再帰的な自己知において不可欠な「本質的継ぎ目 *Fuge*」(Ebd., 157) として機能する「知る者 *der Wissende*」(Ebd., 157) を人間に見ようとしている。この知は、単に〈私が知る〉という主観的知とは異なる。それは、主観が対象を把握する働きではなく、いわば人間における現出・現象のことなのである。人間の知ではなく、人間における現出・現象としての知である。全体としての存在者の自己知のなかで介在的に働く、この人間における知こそ、ハイデガーが『自由論』における根底と実存の中心としての人間における悟性、人間的自由における知に認めた積極的側面であったように思われる。

しかし、うえて述べたように、結局ハイデガーは、『自由論』の構想に解消し難い困難を見る。それは、光が暗い根底を照らせば照らすほど、根底はさらに暗闇に自らを鎖すという事態、これによって両者の「統一がますます統合不可能になるばかりではなく、互いに引き離されさえする」(Ebd., 279) という困難である。すでに述べたように、「神の悟性のなかに体系がある。しかし神自身は、体系ではなく、生命である」。それゆえ、悟性に対立する根底は「体系の他者」(Ebd., 278) として排除されることとなるのである。従ってこの体系の統一は、ハイデガーが求める全体としての存在者の統一ではないということになるだろう。シェリングは体系の統一ということでそうした真の全体性の統一を考えていない。それゆえ、ハイデガーにとってはこの全体としての存在者の自己知の働きに介在すべき人間は、『自由論』では悟性の統一である限りの体系の統一を介在する者でこそあれ、全体としての存在者の自己知の結構、あるいは生命としての神を介在する者ではないことが明らかになるのである。

---

(『短論文』、196頁) は言えず、一切は神の内部にある神自身であるからして「神には他の物に対する愛というものはあり得ない」(『短論文』、197頁) と述べる (Vgl. Gebhardt 1921, 224)。

<sup>28</sup> Gebhardt 1921, 219.

<sup>29</sup> ゲーブハルトによれば、「レオネ・エブレオは彼によってスピノザがプラトン主義との結びつきに足を踏み入れた者として証明されている」(Ebd., 188)。エブレオはユダヤ人(教徒)であったが、同時に強いプラトン主義者でもあった (Vgl. Ebd., 182-185)。

<sup>30</sup> レオネ・エブレオ(本田誠二訳)『愛の対話』平凡社、1993年、439頁。

<sup>31</sup> Högbe, Wolfram, *Prädikation und Genesis. Metaphysik als Fundamentalheuristik im Ausgang von Schellings »Die Weltalter«*. STW 772, Frankfurt am Main: Suhrkamp 1989, S. 52.

### 3 節 後期シェリングにおける思惟以前のなもの

このような見解に対しては、『自由論』は、むしろ、根底と実存の真の全体的統一を無底によって考えようとしているのだ、という反論が予想される。むしろハイデガーがこの絶対的無差別としての無底、愛としての無底をほとんど無視することは、先行研究によって再三再四指摘されてきたところである<sup>32</sup>。敢えて言うてしまうなら、『自由論』での無底に関する論述は、人間との関係を扱うというより、単に理論的な支柱として挿入されている印象が強い。「シェリングは本質的な歩みの必然性を見ていない」(Ebd., 280) という無底についての論述をめぐる批判も、そこにおける人間の役割に関する洞察の欠如に向けられていると言える<sup>33</sup>。ここに、ハイデガーの無底に対する冷淡さの主たる要因があると考えられる。本稿では、殊更に無底を論じることはせず、ハイデガーとシェリングの関係を探るために、むしろ後期シェリングの思惟以前の存在をその視座として取り上げたい。これは、あらゆる可能性、あらゆる根拠に先行するそれ自身は没根拠的な実在として、無底の問題と一定の連続性をなしている<sup>34</sup>。よって本節では、次節以降の準備として、思惟以前のものの意味について簡単に示しておく。

さて、後期シェリングは、消極哲学と積極哲学を対置して、両者がひとつの全体をなす「唯一の哲学」(SW II-3, 94) を構想した<sup>35</sup>。消極哲学という名称は、理性のうちにのみ留まり、現実存在するものを度外視するヘーゲルに代表される従来の理性主義的、論理主義的哲学を名指している。これに対して、シェリングは、理性は自らのうちに留まることなく、自らの外に出て現実的内容を確保しなければならないとする。究極的現実とは、「もしく或るもの etwas が現実存在する」と前提するなら、「なにか或るもの irgend etwas もまた必然的な仕方現実存在する」という帰結は避けることができない<sup>36</sup>というカントの言葉が示す「あらゆる事物の究極の担い手」<sup>37</sup>として「無条件的な必然性」<sup>38</sup>、「人間的理性にとっての真の深淵 der wahre Abgrund für die menschliche Vernunft」<sup>39</sup>である。そこでシェリングが構想したのが、歴史的世界の成立を可能にする「何かある積極的なものを、つまり意志や自由、行為の遂行を想定」<sup>40</sup>して論じる積極哲学であった。意志や自由が意味をもつためには、必然的に現実存在するものが意志や自由にとって如何ともし難いものではなく、いわ

<sup>32</sup> この論点からの代表的研究としては、大橋良介「シェリングの無底と体系 ——ハイデッガーの解釈との対決」『モデルネの翳り ——シェリング『自由論』の現在』晃洋書房、1999年、127-145頁が挙げられる。

<sup>33</sup> Vgl. GA 42, 280.

<sup>34</sup> 「シェリング自身は『自由論』のなかでこれ [=思惟以前の存在] に「無底 Ungrund」の表現をあてている。なるほどシェリングは、この無底を彼の後期哲学において思惟以前の存在によって置き換える。だが体系の機能的位置づけは同じものである」(Gabriel 2010, 96 f.)。

<sup>35</sup> 藤田正勝「積極哲学と消極哲学」(西川富雄監修)『シェリング読本』法政大学出版局、1994年、320-332頁を参照。

<sup>36</sup> KrV. B, 643.

<sup>37</sup> Ebd., 641.

<sup>38</sup> Ebd., 641.

<sup>39</sup> Ebd., 641.

<sup>40</sup> Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph, *Einleitung in die Philosophie*. Hg. von Walter E. Ehrhardt. Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog 1989, S. 13.

ば融通の利く偶然的なものとして示される必要がある。「積極哲学の諸原理の別の演繹」<sup>41</sup>では、つぎのようにその可能性が示される。

ポテンツは、思惟以前の存在に先行しなかった。そのため、ポテンツは、この〈思惟以前の現実存在者〉の現実態において克服されることもできなかった。そのことによって、まさにこの思惟以前の現実存在者のなかに、〈排除されえない偶然性 nicht auszuschließende Zufälligkeit〉が置かれるのである。（SW II-4, 338）

ポテンツ（可能性）と現実性は対立的だが、相互に置換可能でもある。だがもし原初において可能性を現実性の出発点に置くとすれば、その出発点そのものがふたたび現実的でなければならず、この遡行は無限につづく<sup>42</sup>。よって出発点は現実性に置かれなければならない。現実的な思惟以前の存在が絶対的なプリウスなのである。これは、「〈存在可能なもの〉を先行者としてのみ排除している ausschließt」（Ebd., 338）。だが、後続する偶然的な可能性として排除してはいない。排除しないのみならず、思惟以前の存在は、これとは「別の存在 ein[...] andere[s] Seyn[...]」（Ebd., 349）の「ポテンツが現象することを初めて可能にする」（Ebd., 338）とされる。排除しないという意味で可能にすることは、そもそもその別の存在の可能性の現出を保証するものではなく、これは偶然的である。しかしこの他なる可能性を自らのうちに許容する思惟以前の存在は、その反対も可能なものとして、つまりそれ自身もまた偶然的なものとして示されることとなる。つまり、この思惟以前の現実性は、それがそれでなくても可能なもの、別様であることが可能なものであるが、にもかかわらずそれとして現にある、偶然的な必然性として明らかになる。

理性的思惟にとってこの思惟以前の存在とは、「如何にわたしたちが早く来たとしても、すでに現にあるもの」（Ebd., 341）である。これは人間の理性的思惟が、つねにすでに、そのうちに自らを見出さなければならない、自らが措定したのではない事実性である。そこでもっぱら本質や可能性に関わる理性は、純粋な事実として思惟以前の存在の何（Was）を、本質を知らず、この事実性を「絶対的な自らの外 ein absolutes Außer-sich」（SW II-3, 163）として考える。しかし同時に理性は自らの限界を越えて「絶対的に脱自的 absolut ekstatisch」（Ebd., 163）であるともされる。理性はこの現実存在を前にして「真の内容を現実的内容として所有しえない」（SW II-4, 345）ことを看取するが、ここで理性は「自己の外に置かれ」（Ebd., 345）、「この存在に対して身を屈する」（Ebd., 345）のである。だがしかし理性が身を屈するのは、「ただちにこの存在に向かってふたたび立ちあがるため」（Ebd., 345）である。すなわち、「思惟以前の存在するものとは何であるのか was das unvordenklich Seyende ist」（Ebd., 345）という問いをもって立ちあがるためなのである<sup>43</sup>。あるいは、「なぜそもそもなにかが存在するのか？ なぜ無ではないのか？」（SW II-3, 7）と問うためなのである。

<sup>41</sup> Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph, *Andere Deduktion der Principien der positiven Philosophie*, in: Ders., *Philosophie der Offenbarung*, Ab. II. Bd. 4. Hg. von K. F. A. Schelling. Stuttgart: Cotta'sche Verlag 1858, S. 335-356. 1841年までには成立（諸岡道比古訳「積極哲学の諸原理の別の演繹」『人文社会論叢 人文科学篇』20、弘前大学、2008年、17-18頁を参照）。

<sup>42</sup> Vgl. Gabriel 2010, 90 f.

<sup>43</sup> 藤田正勝「積極哲学と消極哲学」（前掲）、ここに関しては329-330頁を参照。

ここに、シェリングにおける偶然的な思惟以前の存在と、これに対抗する理性的思惟の決定的な振る舞いを見ることができる。これを確認して、次節に移ることにする。

#### 4 節 思惟以前のなものとしての存在、あるいは自然の生命

後期のハイデガーは、所々で思惟以前のものを自らの言葉として使い<sup>44</sup>、自らの存在の別表現としている<sup>45</sup>。シェリングとの連関においてはつぎのように述べられる。(i)「形而上学は必然的に思惟以前のものところで終わる」(GA 73.2, 933)、(ii)「シェリングはこの思惟以前のものをいまだ表象的思惟から理解している」(Ebd., 933)。(i)は、ハイデガーの形而上学批判とシェリングの消極哲学批判の近さを匂わせるが、とりあえずは(ハイデガーの言う)思惟以前のものが形而上学の限界を画すことを述べる。(ii)は、シェリングもまた思惟以前のものを形而上学的表象によって捉えてしまう、つまり本来の仕方では思惟していないと述べる。表象的思惟の意味と思惟以前のものに相応しい別の思惟とはなにか。後期の対話篇「アンキバシエー [=接近]」(1944/45)<sup>46</sup>によれば、表象的思惟とは、具体的にいえば、超越論的 - 地平的表象の思惟のことである。

研究者

この前、私たちは思惟を超越論的 - 地平的表象作用の形態において描き出しました。

[…]

教師

それ [=超越論的地平] は、諸対象の見相 *Ausschen* を凌駕する *übertrifft* ものです。

学者

ちょうど超越が諸対象の知覚を追い越す *überholt* ように。

教師

それゆえ、私たちは、地平と超越がなにを意味するのかを、凌駕 *Übertreffen* と追越し *Überholen* によって規定するのです。(GA 77, 111)

ハイデガーの見解を代表する「教師」は、「超越論的 - 地平的表象作用」の本質を超越における「凌駕 *Übertreffen*」と「追越し *Überholen*」に見る。これは、形而上学期のハイデガーが論じた現存在の地平的超越への自己批判でもあることは容易に見て取れる<sup>47</sup>。ハイデ

<sup>44</sup> Vgl. GA 77, 231.

<sup>45</sup> Vgl. GA 81, 143.

<sup>46</sup> Heidegger, Martin, Ἀρχιβασιλή. Ein Gespräch selbstdritt auf einem Feldweg zwischen einem Forscher, einem Gelehrten und einem Weisen, in: Ders., *Feldweg-Gespräche* [Erdachte Gespräche 1944/45]. Hg. von Ingrid Schüßler. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1995 (=Gesamtausgabe Bd. 77. III. Abteilung. Unveröffentlichte Abhandlungen/Vorträge - Gedachtes), S. 1-160.

<sup>47</sup> 『哲学への寄与』(1936/38)では、超越に対する批判的立場はつぎのように表明される——「存在者を乗り越える *übersteigen* こと(超越)が問題なのではなく、そうではなく、この区別 [=存在論的差異] を飛び越えそれでもって超越を飛び越える *überspringen* こと、そして、原初的な仕方では存在とその真理から問うことが大事なのである」(GA 65, 250 f.)。

ガーは、ここで凌駕や超越といった地平的な超越そのものを問題視する。思惟以前のとは、辞書的意味では、〈考えることができないほど古い〉、〈人類の記憶が及ばない〉過去の事柄を指すが、これと類比的に、超越が凌駕することも超越することもできないものこそ、ハイデガーが同じ対話篇でシェリングの言葉を借りて「思惟以前のなもの」(Ebd., 146)と呼ぶものである。超越に基づく表象的思惟が思惟できないものである。ハイデガーは、シェリングを思わせる口ぶりで、これを「そこまで私たちが元来思索し入ることができない」(Ebd., 146)もの、「それに先んじてはそもそももうなにも思索されえない」(Ebd., 231)が、そこから「思索の本質が始まる」(Ebd., 146)ものと呼ぶ。しかしシェリングもまだ表象的思惟に囚われていた。それはすでに見たように、〈思惟以前の存在するものとは何であるか?〉という本質への問いに特徴づけられる理性的思惟を指すと考えられる。こうした形而上学の主導的問い「存在者とは何であるか?」(GA 65, 12)に対して、ハイデガー自身は、むしろ「どのように存在は本質化するのか wie west das Seyn?」(Ebd., 54)を問う。この点においてハイデガーとシェリングは別れる。シェリングが本質と事実(現実)の区別を前提するのに対して、ハイデガーはむしろこの区別以前の存在の本質化(Wesung)の働きへと遡及して問うからである。

ところで、ハイデガーの言うところの存在の思惟以前性とは、この本質化の非覆蔵性のうちよりほかにはないだろう。これは、「存在者とそのなかに現前するところの非覆蔵性」(GA 67, 219)であるが、この「非覆蔵性それ自身はそれとしては覆蔵されたまま」(Ebd., 219)のものである。存在そのものが非覆蔵性なのだが、非覆蔵的なのは現前してくる存在者の方であって、「非覆蔵性の「非」は非覆蔵性自身に関して起こらない」(Ebd., 219)。ここに「自らを自己自身のうちに覆蔵する」(Ebd., 219)存在の自己覆蔵性がある。この自らを覆蔵する覆蔵性にこそ、後期ハイデガーにおける脱根拠性が隠されているというのが、ここでの見立てである。

存在者を一定のあり方において規定する存在の非覆蔵性は、現代で言えば第一の原初(der erste Anfang)に発するゲシュテル(Gestell)という存在のゲシック(Geschick)の形態をとっている。これは「人間的には超克され menschlich überwunden」(GA 79, 69)うるものではない。もし超越によって形而上学を別の原初、別のゲシックへ乗り越えたとすれば、それ自体がふたたび形而上学である。なによりも、存在の思惟以前性は、超越によってその背後に回り込んで、それをなにか別のものに置き換えることが不可能であることを告げている。ハイデガーは、形而上学的意味での「超克 Überwinden」(GA 97, 497)を「超越の絶えざる固定化」(Ebd., 497)として退け、むしろこれに対して、原初へ向けた「回想的思索 das andenkende Denken」(Ebd., 497)を自らのものとして積極的に提示するのである。

ここに、現 - 存在としての人間における介在的な知の働きを見出すことができる。それは、存在そのものの自己覆蔵と自己贈与に介在する人間における知である。ここで知とは単に現れではなく、また同時に隠れでもある。ヘルダーリンに即して言うなら、夜の時代にあつてすでに立ち去り、いまだ還らない神々を回想する<sup>48</sup>詩作の言葉の内実ということ

<sup>48</sup> Vgl. Hölderlin, Friedrich, Brod und Wein. An Heinze [1801], in: Ders., *Gedichte nach 1800* (Text). Hg. von Friedrich Beissner. Stuttgart: Kohlhammer 1951 (=Große Stuttgarter Ausgabe, Hölderlin Sämtliche Werke Bd. 2-1), v. 31-36 und v. 115-122, S. 91-94.

になるだろう。「言葉が […] 思惟以前のものを守る wahr」(GA 74, 112) ののである。それは、「言葉が在りしものと来たらんとするものを守る」(Ebd., 112) ことである。在りしものが思惟以前の過去だとすれば、来たらんとするものも思惟以前の将来の別の原初、別のゲシックとなるだろう。この過去から将来への移行、第一の原初から別の原初の移行において、人間における知、言葉が介在的な役割を果たす。ここで二つの別個の原初が置かれるのではなく、むしろ同じ原初の自己変貌が問題である。介在された移行は、存在の「ゲシックの変遷 Wandel」(GA 79, 69)、「第一の原初のまったき変貌」(GA 42, 279)、存在そのものの自己変貌である。存在そのものが〈自らを変貌させる〉という意味では、これは存在の自己再帰的、それゆえ中動的とも言える——神や人間の自由・意志によることがない——自己変貌である。

思うに、この自己変貌の運動は、フュシス、自然の生命の動きである。これはハイデガーやシェリングがしばしばヘラクレイトスを引き合いに出して語る世界造化の火炎現象との近さのうちにある。つまり消えゆくものと新たに立ち上がるものとの同時的な対立と統一からなるフュシス、自然、生命の自己反復である。たえず意志の形而上学と結びついてきたシェリングではあるが、彼もまた初期からたえず自然の生命との近しさ、それゆえハイデガーの言うフュシスとの近さにいたこともまた事実である。彼はその後期の神話的考察のなかでつぎのように生命の対立と統一を炎の運動に譬えていた——「対立が永遠に生じつづけるのは、統一によってたえずくりかえし灼かれんがためである。そして対立が永遠に統一によって灼かれるのは、たえずそれを新たに生き抜かんがためである」(SW I-8, 230)。そこには同一性と同一性を壊す新たなものとの対立と統一の生命的な更新の過程がある<sup>49</sup>。同じものの二度三度の繰り返しではなく、そのつど「唯一的かつ一回的な einzig und einmalig」(GA 65, 385) フュシス、自然の生命的な出来事である。ハイデガーは、時にフュシスや存在の非覆蔵性を「竈の火」(Ebd., 228) と詩的、神話的に表現するが<sup>50</sup>、シェリングにとっても竈とは、「たえずおのれ自身を灼滅するとともにその灰からふたたび新たに甦る生命の竈 der Heerd des beständig sich selbst verbrennenden und aus der Asche wieder neu verjüngenden Lebens」(SW I-8, 230) なのだった。ここからまた『自由論』の神が悟性の体系に還元されえない生命とされていたことも象徴的に想起されるのである。言うなれば、人間とは、その知、言葉のうちにおいて、自己自身が絶えずそのうちに生きるその秘匿されたフュシス、自然の生命の何故なし (ohne Warum) に燃えあがり、生きつづける炎の圏域において、あるいはその傍らに座してそれを守る者である——たとえ隠された郷愁 (Heimweh) のうちにひとり「無用者」(唐木順三) の如く彷徨うとしても、それもまた、「思惟以前のものへ流離う (ヘルダーリン)」(GA 74, 100) という仕方で、忘却のまま家郷的な竈に繋ぎ留められた人間の姿であろう。

<sup>49</sup> 生命現象の一回性、反復性の問題については、檜垣立哉「単独的なものの様相 ——偶然性・一回性・反復性」『哲學』No. 63、日本哲学会編、2012年、115-130頁が示唆的であった。

<sup>50</sup> 拙論「〈根源の場所〉と〈かまど〉 ——M.ハイデガーのヘルダーリン解釈をめぐる」『立命館哲学』第27集、立命館大学哲学会編、2016年、95-125頁を参照。

## 結び

さて、本稿は、ハイデガーの形而上学期におけるある種の人間中心主義的思想の内実を確認することから始められた。具体的には、第1節では、ハイデガーの形而上学構想と思惟以前の存在との近さを、M.ガブリエルによるハイデガーの読解を批判的に瞥見しつつ、その問題性についての指摘を梃子にして、後期ハイデガーへ目を移していった。第2節では、ハイデガーによる『自由論』の解釈を見ることにした。そこで、ハイデガーの関心を摘出し、新プラトン主義に淵源するスピノザの「神の知的愛」に象徴される、神ないし全体としての存在者における人間における知の介在性が見出されることとなった。これは、ハイデガーの形而上学期における人間存在の超越に基づく超越論的・地平的表象を基本とする人間中心的な思想、すなわち現存在が現存在自身のために存在(世界)を投企するという思想には見いだされないものである。従来、殊更に解明されることがなかった知の介在的ないし媒介的位置づけ、その介在性は、後期のハイデガーの思想(形成)において重要な役割を果たした、というのがそこで得られた見立てであった。

この見立てのもと、第3節では、『自由論』解釈から、後期シェリングの思惟以前の存在へ視点を移動させつつ、この二人の哲学者の比較考察のなかに現・存在の問題としての人間における知の介在性を解き明かすために、後期シェリングの積極哲学における理性的思惟と思惟以前のものとの関係を本質と純粋な事実性の形而上学的対立に見定めた。そして最後に、第4節では、ハイデガーとシェリングにおける思惟以前のものと思索の意味の解明のなかで、存在そのもの、フュシスにおける再帰的、中動的自己変貌という存在中心的な出来事過程における、人間における知の介在という役割がヘルダーリン的な回想(Andenken)のうちに示されることとなった。

結局、そのようにして辿り着いたのは、地平的次元の超越運動には回収されえない、根源的な自然の生命の実在的次元と人間的次元の〈関わりあい〉であり、そこへ向けた更なる思索への促しであったように思う。つまり、ただ単に人間の理性、思考空間・表象空間に〈底がない〉という事態が問題ではもはやないということである。むしろ、存在そのものにこそ〈底がない〉、という事態こそがより根本的である。それは、原因・由来の不在、それについての知の不在とは言われえない。この問題に関しては、より詳細な解明が必要である。だが、つぎのハイデガーの謎めいた言葉は、それについてのひとつの示唆として受け取ることができるかもしれない——「偶・然 Zu-fall も、もろもろの原因の系列のなかにあいた穴とはなにか別のものです。[...] 偶然は、同じもの das Selbe と同じ性 Selbigkeit の本質と親和的なのです。偶・然においては、そのたびごとになにかあるものが再帰するのです kehrt [...] zurück」(GA 77, 96)。

## 文献略号一覧

- GA:** Heidegger, Martin, *Martin Heidegger Gesamtausgabe*. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1975 ff.
- Briefwechsel:** Heidegger, Martin und Jaspers, Karl, *Briefwechsel 1920-1963*. Hg. von Walter Biemel und Hans Saner. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1990.
- SW:** Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph, *Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling Sämtliche Werke*. Hg. von K. F. A. Schelling. Stuttgart: Cotta'sche Verlag 1856-1861.
- GPP:** Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph, *Grundlegung der positiven Philosophie*. Münchner Vorlesung WS 1832/33 und SS 1833. Torino: Bottega d'erasmo 1972.
- KrV. B:** Kant, Immanuel, *Kritik der reinen Vernunft*, 2. Aufl. 1787.
- Bericht:** Editorischer Bericht, in: Hühn, Lore und Jantzen, Jörg (Hg.), *Heideggers Schelling-Seminar (1927/28)*. Stuttgart: fromman-holzboog 2010, S. 267-317.
- GGW:** Gadamer, Hans-Georg, *Hans-Georg Gadamer Gesammelte Werke*. Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) 1960 ff.
- Gabriel 2010:** Gabriel, Markus, „Unvordenkliches Sein und Ereignis. Der Seinsbegriff beim späten Schelling und beim späten Heidegger“, in: Hühn, Lore und Jantzen, Jörg (Hg.), *Heideggers Schelling-Seminar (1927/28)*. Stuttgart: fromman-holzboog 2010, S. 81-112.
- Gebhardt 1921:** Gebhardt, Carl, „Spinoza und der Platonismus“, in: *Chronicon Spinozanum*. Tom I. Hagae Comitatus (=Den Haag): Curis Societatis Spinozanae 1921.
- 『短論文』: スピノザ (畠中尚志訳) 『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』岩波書店、2005年。

※本稿は、ハイデガー・フォーラム第12回大会(2017年9月17日於京都大学)、特集「ドイツ古典哲学」において筆者が読み上げた発表原稿に加筆修正を施したものである。当日は、大会及びその後の懇親会の会場において、貴重なご質問、ご批判、ご意見を頂いた。これらの頂いたご意見は、非力ながら可能なかぎり本稿の修正に反映させて頂いたつもりである。今回は、筆者の至らぬ点を思い知るとともに、今後の研究の進展のためにおおくを教えられる得難い機会となった。ハイデガー・フォーラム実行委員会の皆様には、大変お世話になった。記して感謝申し上げたい。

なお、本稿は、科学研究費補助金(特別研究員奨励費:課題番号17J02438)による研究成果の一部である。

Kentaro OTAGIRI

### *Heidegger und Schelling*

— *Zum Grund und der Existenz und dem unvordenklichen Sein im Zusammenhang mit der Dazwischenheit des Wissens*